

1. アイヌ史研究の成立

*ともとはヨーロッパ系研究者が始める。

1854年以降、函館近辺に入り、アイヌ墓地から遺骨を盗掘したことが問題となる。

・金田一京助らの言語・文化研究のはじまり（本格研究の嚆矢）

日本語の成立を知る手がかりとしてのアイヌ語研究の必要性

アイヌ語古語の研究へ

*帝大文学部の院生による研究言語の分担

ユーカラが叙事詩であることの発見。

イリアス・オデュッセイアの連想とアイヌ白人説を言語学的に解明しようとする
アイヌ語研究=ユーカラ研究ということに

・金田一と知里幸恵の出会い 「私たちの先祖の自由の天地……」

ユートピア的なアイヌ社会と裏腹の未開観の定着 cf.ルソー:高貴なる野蛮人

あたかも史実のように、無批判に広まる

・アイヌ語への高い評価

アイヌ語研究の深化とゆがみ ... ユーカラ研究だけが深化

2. 東北アジアとの関係

*アイヌの分類：北海道アイヌ、サハリンアイヌ、千島アイヌ、本州アイヌ

・サハリンアイヌから始まったアイヌ語の研究

金田一京助・知里真志保らの研究

・高倉新一郎「近世に於ける樺太を中心とした日滿交易」1939年

*第二次大戦後くらいは変化のない小さな社会というのが前提とされる。

・孤立したアイヌ社会像の定着 唯物史観，発展段階説の影響（アジア停滞論の影響もあり）

奥山亮らの研究

・東北アジア史のなかのアイヌ社会（1980～90'sに大きな変化）

海保嶺夫『中世の蝦夷地』1987年 国史研究から見たもの。但しアジア社

榎森進『アイヌの歴史』1987年 会の広がりから見ようとする。

菊池俊彦・松浦茂・佐々木史郎らの影響:交易をキーワードにする

*使われる資料の変遷

戦前：基本的に日本語資料、東洋史研究者は漢文資料を使う。考古資料の導入が僅かながら始まる。

80's : 漢文資料の導入と満文資料の存在が知られ始める。

松浦茂「清朝辺民制度の成立」(史林 70-4 1987)

90's : 漢文資料と和文資料のすりあわせ

【史料】

1. 金田一京助「アイヌ語ノート」(『金田一京助全集』第14巻,三省堂,1993年)422
~ 423頁。

先生,先生は,貴い御時間と,貴重なお金をたくさんおつかいになって,私共のユーカラのために,そんなにお骨折り下さいまして,私共のユーカラというものは,そんな値打ちのあるものなのでございましょうか

だってユキエさん,そうじゃありませんか。ユーカラは,あなたがたの祖先の英雄譚をば,詩の形に謡い伝えている文学以前の文学,やかましい叙事詩というものなのです。叙事詩は西洋でも,そうやたらにはありません。ヨーロッパ文学の元祖といわれるイリアッド,オデッセイ,ローマ人のエニード,東洋では,印度人のマハーバーラタ,ラーマヤナという二大叙事詩があって,これが世界の三大叙事詩,今から百年程前にフィンランドの民間に,発見されたカレワラを加えて四大叙事詩といわれる。ユーカラは,直ぐにそこへ続く存在ですよ。人類が文字を持つ迄の長い長い期間,こうして,どこまでも皆口づたいに暗誦して古い事を伝えていたもので,日本でもそうだったのですが,ただそれは遠い国の事か遠い昔のことで,想像して見るよりほかに仕方のない夢のような話でしたのに,たまたまアイヌが文字を用いず,そういう太古の生活をいままのあたりに見せてくれる意義深い生活なのですもの。それにアイヌ種族はね...幸いにも,叙事詩を持つほどの民族であったのです。決して悲観すべき低劣な種族ではなかったという喜びで,私はいっぱいです。あなたも喜んでよいのです。

たまたま世界の東のはずれに片寄って住んだため,文化の光に遠のいて,こないだまで石器・土器の生活をしてきたから,丁度遅く生れた兄弟のようなもので,それでおくれているだけのことです。...アイヌは石器時代の白色人種の分れであるという説は,人類学者の間に段々高まって来ているやさき,文化方面のユーカラの発見によって,この説が今一段と有力になるではありませんか。

今までは外貌の粗野な一面だけを見て,一口にアイヌ,アイヌと軽蔑されてきましたけれど,われわれの附近で,ほかに,叙事詩をもつ民族がありますか。アイヌのみではありませんか。尤もユーカラは過去のことを謡うものですから,こういうものへあなた方,若い方が,たずさわっては居られますまい。

若いあなた方は,遅れを取らないように,どうか,新しい知識をどしどし吸収して進んで下さい。私は,みんなのあとから,落穂を拾うつもりで,年寄りの亡くならない内に書き取ってしまうつもりです.....

先生,わかりました。ありがとうございます。今まで,私たちのことと言うと何でも恥しいことばかりのように肩身をせまく思って居りました。たった今,目がさめました。縁もゆかりも無い先生がそんなに御心をくだいて下さいますのに,私ど

もが、あんかんとしてしまっていて、何という愚かなことだったでしょう。只今から私は私の一生をユーカラの為にささげます。

2. 金田一京助「アイヌの文学」(『金田一京助全集』第7巻,三省堂,1992年)18頁。
...吾々は敢て、イリアッド・オデッセーを称する其意味を以て、叙事詩 - 然り、一大国民叙事詩である - と呼ぶことをさえ、憚らざらんとするものである。
3. 知里幸恵編訳『アイヌ神謡集』(岩波書店,1978年)3~5頁。

*言語喪失のみを惜しむ

その昔この広い北海道は、私たちの先祖の自由の天地でありました。天真爛漫な稚児の様に、美しい大自然に抱擁されてのんびりと楽しく生活していた彼等は、真に自然の寵児、なんという幸福な人だちであったでしょう。

冬の陸には林野をおおう深雪を蹴って、天地を凍らす寒気を物ともせず山又山をふみ越えて熊を狩り、夏の海には涼風泳ぐみどりの波、白い鷗の歌を友に木の葉の様な小舟を浮べてひねもす魚を漁り、花咲く春は軟らかな陽の光を浴びて、永久に囀る小鳥と共に歌い暮して露とり蓬摘み、紅葉の秋は野分に穂揃うすすきをわけて、宵まで鮭とる篝も消え、谷間に友呼ぶ鹿の音を外に、円かな月に夢を結ぶ。嗚呼なんという楽しい生活でしょう。平和の境、それも今は昔、夢は破れて幾十年、この地は急速な変転をなし、山野は村に、村は町にと次第々々に開けてゆく。

太古ながらの自然の姿も何時の間にか影薄れて、野辺に山辺に嬉々として暮していた多くの民の行方も亦いずこ。僅かに残る私たち同族は、進みゆく世のさまにただ驚きの眼をみはるばかり。しかもその眼からは一挙一動宗教的感念に支配されていた昔の人の美しい魂の輝きは失われて、不安に充ち不平に燃え、鈍りくらんで行手も見わかず、よその御慈悲にすがらねばならぬ、あさましい姿、おお亡びゆくもの.....それは今の私たちの名、なんという悲しい名前を私たちは持っているのでしょうか。

その昔、幸福な私たちの祖先は、自分のこの郷土が末にこうした惨めなありさまに変わるとは、露ほども想像し得なかったのでありましょう。

時は絶えず流れる、世は限りなく進展してゆく。激しい競争場裡に敗残の醜をさらしている今の私たちの中からも、いつかは、二人三人でも強いものが出て来たら、進みゆく世と歩をならべる日も、やがては来ましょう。それはほんとうに私たちの切なる望み、明暮祈っている事で御座います。

けれど.....愛する私たちの先祖が起伏す日頃互いに意を通ずる為に用いた多くの言語、言い古し、残し伝えた多くの美しい言葉、それらのものもみんな果敢なく、亡びゆく弱きものと共に消失せてしまうのでしょうか。おおそれはあまりにいたましい名残惜しい事で御座います。

アイヌに生れアイヌ語の中に生いたった私は、雨の宵、雪の夜、暇ある毎に打集って私たちの先祖が語り興じたいろいろな物語の中極く小さな話の一つ二つを拙ない筆に書連ねました。

私たちを知って下さる多くの方に読んでいただく事が出来ますならば、私は、私

たちの同族祖先と共にほんとうに無限の喜び，無上の幸福に存じます。

大正十一年三月一日

- 4．金田一京助「アイヌ文学について」(『金田一京助全集』第15巻，三省堂，1993年)253頁。

昔，文部省がこしらえた読本に「アイヌの話」というのが二科に続いてある。第何科，前科の続き「アイヌは無学文盲にして」と書いてある。それは文字がない，本がないから無学文盲だと思ったのであって悪意があるのでも何でもない。アイヌと日本の子供が同じ学校で机を並べて本を学ぶと「アイヌは無学文盲にして」と云われる，ところが成績では一番である。だから涙を流して口惜しがる。私のところに幸恵さんという女の子が来ている時に「読本が辛い」と云う。こんな清らかな娘さんでも僻みがあるのかなと思ったが，この人が死んだあと大震災の時に東京が焼けて教科書が無くなったなら田舎から東京へ寄附されてきた。私の子供が学校から貰って来たのをなんとなしに見たら，それだった。「第何科前科の続きアイヌは無学文盲にして」これを見て幸恵ちゃんの云ったのはこれだと思った。

- 5．1915(大正4)年版『尋常小学読本』巻10「第二十二課 あいぬの風俗」(文部省，1915年)79～83頁。

是は北海道に住するあいぬ人を画がけるものにて，左は男子，右は女子なり。あいぬの男子は髪とひげとを長くのばし，耳に金属製の輪をはめ，こしに小刀をさぐ。女子は耳に耳輪をはむること男子に同じく，又口の周囲，手首・手の甲等には入墨をほどこせり。然れども入墨をほどこすことは今は全く禁ぜられたり。

あいぬの風俗はこれのみにても既に内地人と同じからず。其の衣服・食物・家屋の有様に至りても異なる所多し。男子も女子も寒き時は犬の皮などにて造れる羽織の如きものを用ひ，又あつし織の短きつゝ袖を着，足にもあつし織のきやはんをはく。あつし織とは，おひようといふ木の皮を細く裂きて織りたる織物なり。

食物は粟・稗・うばゆりの根等を主とし，鹿の肉は珍味として之を賞美す。

其の家はほつたて小屋の如く，床もなく，天井もなし。唯かづらなどにて，かやを結びて壁に代へ，又かやを並べて屋根となせり。屋内には中央にゐるりを造り，一家之を囲みて談笑す。

あいぬは時々小熊を捕へ来り，一年の間養ひたる後，之を殺して盛大なる儀式を行ふことあり。あいぬの熊祭とて有名なり。殺したる熊の頭は垣にかけて，永く之を保存するを以て，垣の上には多くの頭骨，風雨にさらされて残れり。

あいぬの言語は日本語とは全く異なり。彼等は元は読み書きも知らず，算数の考もとぼしかりしが，今は内地人と同じく，読み書き・計算をもなし得るものあるに至り，中には小学校教員となれるものもあり。

あいぬの数，古は甚だ多かりしが，近年次第に減少して，今は僅かに二万人に足らず。北海道旧土人保護法と称する法律ありて，農業を営まんとするものには土地を与へ，農具・種子等を給し，又政府の費用を以て学校を建つる等，厚く保護の方法を講ぜり。

- 6 . 伊波普猷「オモロ七種」(『改版古琉球』青磁社，1942年) 165頁。
...そのシレブルに定数のないのがあるのと盛に對句を使つてあることは，オモロが希伯來の詩歌に似てゐる點だ。此點に於てオモロの根本形式は希伯來詩と同じく並行体である。
- 7 . 村松伸「忠太の大冒険(一) - 伊東忠太とアジア大陸探検」(『東方』第 154号，1994年)。
忍冬紋様や柱のなかぶくれが，それぞれ，ギリシア建築の「ホニーサックル」，そして，「エンタシス」の伝播した結果である，と見.....アレキサンダー大王の東征とギリシア文明のバクトリアへの移植，そして，ガンダーラにおけるインド文明との邂逅，それが西域を通じて中国の六朝に伝播し，朝鮮半島を辿って奈良の法隆寺に帰着し，推古式を成立せしめた，との幻想のごとき大理論を.....
- 8 . 柳宗悦「アイヌの手仕事」(『柳宗悦全集』第 15巻，筑摩書房，1981年) 526頁。
其のアイヌの着物が出来る工程を見よう。ずつと幼稚な方法で作られてゐるのは言ふを俟たない。それは初期の道具時代を出てゐない。だが不思議である。出来上がる結果から見ると，ずっと進んだ方法で作る吾々の着物の方が，色でも模様でも，俗で低調で，さうして不誠實なものがどんなに多いことか。吾々はアイヌの衣服をかりそめにも下卑なものとか未開のものとか呼ぶことが出来ない。若し美の王國に凡てを持ち出したら，さうして神が審判の位置についたら，原始的だと云はれる多くの着物は，幾多文明國のものをぬいて高い位を與へられてゐるであらう。なぜならそこには虚偽の性質がないからである。さうして創造的な本能が力強く働いてゐるからである。.....
今迄多くの批評家達は，アイヌのやうな民族を目して「未開」とか「原始的」とか云ふ形容詞で總括して了つた。さうしてこの概念はどんなに度々，其の民族の生活や信仰や作物を，程度の低いものと考へ込ませて了つたことか。併しこんな荒々しい危険な見方はない。なる程歴史的順次から見ると，初期の形態を尚残すものであるから，さう呼ばれても致し方ないかも知れぬが，後期の發展が更に正しく更に深いものだと，常に言ひ切ることが出来るであらうか。
- 9 . 金田一京助「片言をいうまで」(初出 1934年：『金田一京助全集』第 14巻，三省堂，1993年) 14 ~ 15頁。
「通じないかな」と一人つぶやきながら途方にくれていると，また三々五々集まっては何か大声にわめきながら遊ぶのである。また寄って行った。今度はことばを換えて，一人の子の耳に下げた輪を指して，「マカナク・アイエプ・ネ・ルエ(何というのか?)」と問うて見た。またふりかえって全部の子供が私を仰いだが，「なあにいつてやがる」といった調子に，「わあ！」とわめいて逃げ出した。
子供らのうちに，絵に見る唐子のような着物 - 多分満州方面からの外来品 - を着ているのが一人あった。その格好がちょっとおもしろかったので，単語を採集する

はずの手帳へ、しょう事なしに、その子を写生し始めた。

私が、その子を見ては鉛筆を動かし動かしするのを目ざとく見つけた子供の一人が、まず何かとわめいた。……

その時だった。ふと思いついて、一枚新しい所をめぐって、誰にもすぐわかるように、大きく子供の顔をかいてみた。目を二つ並べてかくと、年かさのが一番先に「シシ」「シシ」といった。ほかの子も「シシ」、ほかのも「シシ」、とうとうさしのぞいていた子の口がみな「シシ!」「シシ!」「シシ!」。騒がしいったらない。

10. 知里真志保「ユーカラの人々とその生活」(初出 1953 年:『知里真志保著作集』第 3 巻,平凡社,1973 年) 56 頁。

この戦争の相手である異民族を一括してユーカラでは「レブンクル」(rep-un-kur「沖・の・人」)と云うのでありますが、それはつまり「海の彼方の連中」ということで、その連中の中には「サンタ」と称していわゆる山丹人が出て来るし、その山丹人の仲間には「ツイマ・サンタ」(Tuyma-Santa)すなわち「遠い・山丹人」と称して牛の尻尾みたいな髪の毛を背後に垂している連中なども出て来ます。これは明らかに弁髪なので、大陸の民族であることが分かるのであります。

11. 神保小虎・金澤庄三郎『アイヌ語會話辞典』(北海道出版企画センター,1973 年復刻) 100 頁。

サンタンジン(山丹人) Rep un guru

12. 奥山亮『アイヌ衰亡史』(みやま書房,1966 年)。

…また北東アジアの袋小路にうずくまるという地理的条件は、文化の交流を緩慢にし、社会を停滞的にしていた。

13. 山本祐弘「恩怨の間 - 人間知里真志保」(『知里真志保著作集月報』3,平凡社,1973 年) 3 頁。

敷香での調査をほどぼとに切りあげた二人は、東方二、三十キロにあるタライカ湖畔に足をのばした。そこには古い生活様式を保持したアイヌ一家が住んでいることを聞いていたからである。たずねてみると、オホコ(海豹皮衣)を着、ヘトムイエヘ(帽子)もつけているではないか。

……「ギリヤークやオロッコは土人だ。アイヌとは違う」「アイヌには文学があるじゃないか」と、荒い口調で言った。

(討議)

承志: アイヌ人口の記録は?

中村: あまりない。混血の問題などもあり、世帯数の公表があるくらいか。現人口は 10 万人もいない。明治でも 10 万人くらいか。当時、サハリンは数百~数千人。千島は千人前後。

承志: 混血したとき、どのように自称するのか?

中村：個人の認識や主張により異なってくる。

中村：沿岸では漁業権の設定により、経済的にある程度守られていると言える。

杉山：アイヌ史のタイムスパンはどれくらいで考えられているのか？

中村：遑っても 13 ~ 15 世紀以降。アイヌ文化の形成は瀬川さんが研究している。

杉山：文化形成の地域差は？

中村：明確にはわからない。サハリンは 13 ~ 14 世紀以降移住した。千島への移住はもっと後のことである。本州・北海道から彼らは移っていった。アイヌ成立については、諸説あるが考古的に見てもそれほど早い時期とはいえない。

サハリンアイヌの最初の資料は 1413 年の奴児干都司碑。

中村：語り手の感覚ではユーカラは絵空事であり、ウエベケレは本当にあり得る話であると考えられている。今、^{さくら}沙流川流域の流域研究が進んでいるが、他の地域のユーカラを見ると、それに合致しないことが多い。そこからするとユーカラを事実と考えるのは危険である。

承志：アイヌの意味は？

中村：人、男の人。

ku^yi というのはギリヤーク語でいうアイヌのこと。19 世紀のサハリンでは、北緯 50 ° 以北はギリヤークの居住地であり、50 ° 以南はアイヌの居住地であった。

承志：清朝でいう kuye と ku^yi が本当に一致するかはわからない。清朝の記録ではサハリンの南の人は刺青を入れているという。

中村：皇清職貢図にあるのは全くアイヌの風俗である。

(入門にできる参考文献)

菊池勇夫編 『日本の時代史 19』(吉川弘文館)

菊池勇夫 『アイヌ民族と日本人』(朝日選書)